
東方好奇人

かるりーおふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方好奇人

【Nコード】

N3245Y

【作者名】

かりーおふ

【あらすじ】

幻想郷、それは好奇心のそそられる忘れ去られた場所。そこに行ってみたは無いだろうか？なら自力で行けばいい。

第一話

「やっと来れた……」

彼は辺りを見回しながら小さく呟いた。

幻想郷。それは過去に彼が居た世界から隔離された場所。元は隔離などされていなかった。妖怪と人間がお互いに恐れながら暮らしていく、それが自然の摂理だった。しかし、人間は進化する生き物だ。当然科学力は発展していく。それに恐れた妖怪たちは結界を張って幻想郷を隔離した。そして結界には二つの種類が合った。その二つの結果医がある限り、外から自分の意思で侵入すると言う事が不可能となった。だが、彼は違った。

幻想郷の存在を知ったのは10年前だった。

ある森に入った彼は奥まで進んでいった。だが、なぜか入口に戻った。それを不思議に思った彼は辺りの住人やその地域の歴史を調べ始めた。分からない事があれば解明するまでやる、それが彼のモットーだったのだ。

その結果此処には幻想郷と言う場所があると言う事を知った。幻想郷がある事に彼は驚いた。某動画サイトや、色々な所に幻想郷に関する事がある事を知っていたためである。その幻想郷が実在した。その事実を知った彼は幻想郷に入る方法を探し始める。一度気になる事があつたらとことんやる彼は幻想郷に入ろうと企てた。そして、一番有力な方法は幻想の存在となる事だった。つまり、『忘れられた存在』にならなければならなかった。幻想今日は忘れられたものが来るべき場所、彼もそうなれば幻想郷にいけるのだろうと考えたのだ。その日以来彼は幻想郷が存在すると思われる山にひたすら山籠りしていた。

そして十年後、本当に彼は幻想入りした。

辺りを見回しても木ばかりで彼は少しため息をついたが、いてもたってもいられない程の好奇心が芽生えていた彼は、とりあえず前に走って行った。

暫く走って息を乱しながら空を見あげた。雲一つない青空に心が安らぐ。一つ心配なことと言えば周りの光景が殆ど変わっていないということだ。つまり、森で迷子になった用だ。

「こんな所で一体何をしているのですか」

酷く殺気籠った声に彼は鳥肌が立った。恐る恐る振り返るとそこには怪訝な表情をしながら睨みつけてくる射命丸文が居た。彼は射命丸の表情を見て今の状況を悟った。恐らくこの場は妖怪の山であり、人間が立ち入っていい場所ではない為、人間である自分を見つけたため警戒している。恐らくそんなところであろう。

「いえ、少しあなたに用があつたのですよ」

「私に……ですか」

「ええ、新聞ください」

「はっ？」

彼が言った突拍子もない言葉に思わず射命丸は呆けた表情をあらわにした。

「し、新聞ですか？」

「はい。射命丸文と言ったら新聞でしょう？早く新聞をください」

な、なんなのかしらこの人間。みすばらしい恰好でなにを言うかと思えば私の新聞が読みたい？まさかそれだけのために妖怪の山に入ったのかしら……。

「どうしましたか？」

「あ、生憎新聞は持つてないの。だから渡せないわ。今度の新聞はしつかりと配るからその時また読んでもらえるかしら」

「だから今は山から出て行けと」

「理解が早くて助かるわ」

全く、私の新聞を読んでくれる事は嬉しいけど、それだけのために死にに来るような真似してどうするのよ。

「あ、最後に一つ」

まだ何かあるって言うのかしら？

「上昇気流って良いですね」

「は？」

射命丸は彼の言った言葉の意図が分からず首をかしげた。

「ほら、スカートとか捲れてパンツ見えるじゃないですか」
「なっ！……！」

私は思わず顔を紅潮させてしまった。何を言うかと思えばはしたない事。そんな貪欲な感情をわざわざスカートをはいている私の前で言うか？普通は言わない。一体何なのだろうかこの男は……。

「射命丸さんは黒ですか？」

「何言ってるのよ！……！！……！！……！！」

思わず私は男の頭を思いつき叩いた。彼は射命丸の思わずの一

撃に地面に顔を埋めてしまふ。妖怪の力で叩かれればそうなるのも無理はない。

と言っかなんで黒って分かるのよ……。何時の間に見たのかしら……。

彼は何も言わずに地面から顔を引っ張るように出した。

「痛い痛い。何するんですか」

「良いから出て行きなさい。次は無いわよ」

文は動揺を隠しながら冷たく言い放った。

「仕方ありませんね。後日また尋ねる事にします」

「はあ、分かったらさっさと言っ下さい」

彼は有無を言わずに射命丸から離れるようにその場から離れて行った。とは言っても何処に人里があるかすら分からない彼にとって目的地など無い。

暫く歩くと妖怪の山から出ることはできた。だが、相変わらず人里が見当たらない。何時まで経っても見つからない人里を探すのに疲れた彼はその場に座り込んだ。

山から出るのに相当な時間を要したため、辺りも既に茜色に染め上げられていた。

近くに湖があるため、彼は湖の近くへと向かった。

「何してるの？」

ちよいちよいと指で肩をつつかれた彼は少し挙動不審になりながら振り向いた。

「……水でも飲もうかとね」

「でもここは」

「——氷精チルノの縄張り。とでも言うのかな」

「——っ！？何であたいの名前を知ってるの？」

名前を教えていない相手に名前を言い当てられた事に少し警戒心をあらわにしながら恐る恐る彼に尋ねた。

「ここらじゃ有名でしょう？」

「そうかもしれないけど……人間が知ってるとは思えないもの。なんなの？」

手に氷の刃を形成させて、それを彼の首元に突き付けながら尋ねる。

「その氷はチルノ自身が意識を手放さない限り解けない氷。つまり本物の凶器で脅してる訳か。でもそんな事をしてどうするんだい？此処で殺しても、余計な手間が増えるだけだと思うよ。まさか喰らうつもりかい？妖精がそんな事をするとは思えないけど」

チルノが啞然としているのを無視して、その手から氷の刃を奪い取って言う。

「こんな物で脅したって何にもならないさ」

彼は氷の刃を握り碎いた。

「大体殺す気なんてないでしょ」

「当たり前じゃない」

彼の釈然とした言い方にチルノは現実に戻されたのかハッと

して言い返した。

「そこで一つ頼みたい事が」

「なんであんたに頼まれなきゃいけないのよ」

チルノは怪訝な表情をしながら彼に言い放った。確かに頼まれる筋合いはチルノに無い。

「ミステイア・ローレライとこれから会う予定はあるかい？」

「これから会いに行くつもりだったけど……まさかついてくる気？」

御名答と言わんばかりにうなづく彼。それを見たチルノはため息を零した。

「喰われても知らないわよ」

「喰われたら喰われたでそこで終わるだけだし別にいいよ。ただミステイアの歌を聞いてみたいんだ。一体どんなものなのか。それが気になって空腹すら忘れちゃったよ」

そんな事を言う彼にチルノはまた溜め息をする。

実際、興味がわいたらそれに取り掛かる。それが空腹より大事だと思うのであればそれが優先される。人間誰しも優先したい事があるのならばそれが先と脳が考える。彼もまた、空腹より興味を優先しているだけだった。

妖怪に会いに行く。幻想郷をある程度知っている彼だって分かる。自殺行為だと言う事が。でも彼の中で恐怖は既に好奇心に負けている。好奇心に負けた恐怖は既に消え、好奇心によりそれを成し遂げるため、体が実行に移っている。だから彼はやろうと思った事は絶対に成し遂げるまでやるのだ。

チルノだって彼の事を殺そうと思えば殺せる。妖精の中で最強の存在であるチルノがたかがいっぱしの人間を殺すことは容易でも無い。だが、何か殺すに至らない。何か殺す事を阻んだ。それが分からないチルノはただ彼をミスティアのもとへと案内することしかできなかった。だからこれからミスティアに彼が喰われるかもしれないと思うと少し残念な気持ちになる。悲しみなどではなく興味の対象が消えるからである。

ある程度森の中を進んでいくと既に辺りは真っ暗になり、ほぼ近くのものしか視界に入らない程度になっていた。そしてかすかに歌声が聞こえ始めた。

「もしかして——」
「みすちーの歌よ」

歌声を聴いている内に何となくミスティアの歌だと分かっていた。細い声の中に妖艶な響きがこもっている歌に彼は魅了され始めた。

やっぱり、変に気分が高揚し始めたな。

歌で惑わせ人を呼ぶミスティアの歌を聴いている彼が惑わされない訳が無かった。ただ自我を持っているだけ彼は安心していった。

歌声は綺麗だけどなんだかな。感情がこもって無いって言うか。気になって思わずチルノに尋ねた。

「感情なんてこめる必要無いじゃない。ただ餌を食べるだけなんだから」

「まあ、それはこもつともでしょうけど。それじゃあせつかくの歌

声が無駄になるような、そう思いませんか」

「そうなの？」

言っている事が理解できないのかチルノは首をかしげたまま彼を見つめる。

「……何をしてるの」

チルノと彼の会話を断絶したのはミスティアの一言だった。ミスティアは彼を見て少し警戒をしているが、何処か見下している目線で彼を見ていた。

第二話

ミスティアの冷酷な目を見て彼は思った。人間に対して好感触を持つような妖怪では無いと言う事を。

チルノの腕を引っ張って自分側に寄せたミスティアは彼の前に立った。その時に彼は気付く。ミスティアの至る所に着いた血に。恐らく人間の血に間違いはないだろう。歌声に惑わされてやってきた人間を喰った時に飛び散った血に違いない。

「――何者かしら」

「いたって普通の人間ですよ、貴女の歌が聞いてみたくて、ね」
「へえ……」

ミスティアは興味有り気に彼を見つめる。

しかし内心ミスティアは驚いていた。自分の歌を聞いて此処まで自我を持っている人間を見た事が無いからである。

大概の人間は自分の歌を聞いた瞬間に幻想へと運ばれる。だが、この男は違った。歌を聞いてさらに聞きたいと言った。
一体何者なの……？

考えても出てくる訳が無い答えを探しても無駄だと悟ったミスティアは一度咳払いをした。

「聞かせたくないわ」

「ひつど、最低。まじないわー。聞かせてくれたっていいだろ。けち、けちけちけちけ」

「ああ、分かったわよ！！！！」

鬱陶しく感じたミスティアは渋々承諾した。

「ね、ねえチルノ。こいつ何なの？」

嫌悪感をあらわにした表情で彼を見つめながらチルノに問う。分かんない、とミスティアの言葉に突拍子もない返答を返した。

「まあ、歌聞かせてくださいよ」

「……何で、そこまで私の歌が聞きたいのよ」

「そりゃあ、綺麗な歌だし、耳にとっても心地がいいものだから…

…だと、多分思う」

「多分って……」

彼の顔を凝視しながらミスティアは言った。明らかに疑いの表情をしているミスティアを見て彼はため息を一つ零した。

確かに歌を聞きたい理由は気休めなどではない。聞かなければ好奇心を抑える事が出来ないのだ。だからと言って興味本位という理由で歌を聞かせてもらおうなど失礼極まりない事を分かっていた彼は言つに言えなかった。

はぁ……なんて言えば良いんだろ。下手に嘘ついてもばれるだろうしなあ……。

彼が考えて何も言わない様子を見てミスティアは少し微笑んだ。急に微笑んだミスティアを見て彼は動揺したが、危険なものではないと表情を見て悟った。

だがそれが何の微笑みか分からないため彼は思わず尋ねた。

「何で笑ったんだ？」

「気が変わったわ。聞かせてあげる」

その場から少しだけ離れて、目を閉じ深呼吸をした。

辺り一帯はミスティア・ローレイの美声によって包まれた。しかしそれは先ほどとは違い、感情がこもっていて何処か温かいものが感じられた。

歌を聞きながらミスティアの表情を見て少し不思議に思った。先ほどの冷酷な目と違い、子供のような無邪気な温かさが表情から滲み出ているのだ。このような表情もするのか、と彼は思った。

暫くするとミスティアの歌が終わり、チルノが拍手をした。

「先ほどより、とても綺麗でしたよ」

「当たり前じゃない、本気で歌ったんだから」

自慢げな表情をして胸を張るミスティア。

「みすちーの本気で歌ったの、私初めて聞いたかも」

「そうね、何時も人間を呼ぶだけだったから」

「ほら」

ミスティアは彼に対して右手を差し出してきた。彼は意味が分からず首をかしげる。その様子を見たミスティアは呆れた顔をした。

「何、分らないの」

「ああ、そう言う事ですね」

彼は左手を出してミスティアと握手を交わした。

「……違っわよ」

「えっ」

思わずた正しいと思ってやった事を否定されて声が裏返った。

「何かくれるんじゃないの？」

「ああ……」

思わず顔を顰めて呟き、薄暗い虚空に視線を投げて思わずため息をついた。

10年近く山籠りをしていた彼が人に渡すようなものを持っている訳が無かった。何を渡せばいいのか分からず返答に困った。

何時まで経っても返答をしない彼に痺れを切らしたのかミスティアが言った。

「何も無いなら別にいらないわよ」

「ごめんね」

彼は半分顔をひきつらせて笑った。

「今度何か持っていたらその時に渡すよ」

「別にいらないって」

ミスティアは大きく手を上げて、歌って疲れた背筋を伸ばすと、チルノの方へと視線をやった。

「何でこの男はこんな恰好してるのよ」

「あたかも知らない。ただ、会った時この恰好だったよ」

分からずにミスティアは、こっそりと横目に彼を見る。小声で話しているため、二人の会話に気付かない彼は星空を見上げていた。

外人なのかしら、それにしても格好がみすばらし過ぎる様な気がするけど。

「ねえ、外人なの？」

ミスティアは警戒心を解いて明るい口調で彼に問いかけた。「ええ、そうです」と彼は言つてまた星空を見あげた。

「でも、普通とはちょっと違いますかね」

彼の言葉の真意が分からず二人は顔を見合わせた。

「単純に此处に来るのは自分の意思じゃない。だけど私は自分の意思でここに来たんですよ」

「えっ？」

彼の言った言葉が良く理解できなかったのか、二人とも目を見開いて彼を見た。

「自分でって……幻想郷に自分で来たってこと？」

「ええ、まあそういうことです」

「でも結界があるはずじゃ……」

ミステリアの発言に説明が面倒になってきたのかため息を零した。

「じゃあこう言えば分かりますかね」

彼は地面にあつた棒を手にとつて、丸と棒人間を地面に書いた。

「この丸が幻想郷で、こつちの棒人間が私です。幻想郷は誰かに導かれるか、幻想の存在にならない限り此処へは来れませんね」

丸に対して棒人間から矢印を引き、その矢印にバツを付けた。

「だから、此処へ自分の意思で来る方法は？」

「自ら幻想の存在になる事」

理解したミステリアがいち早く険しい表情のまま言った。だが、疑問が解決しないのか「でも」と言った。

「そんなことが可能なのか、って聞きたいんですよ。それは可能だ。単純に忘れ去られればいいんだ。だから忘れ去られるため、10年近く山籠りをしていた。そしたら案の定此処に来れたってことだよ」

ミステリアはぼかんとした顔をしてみせた。

「だから。こんな恰好をしている訳だよ」

「通りで……」

意味を理解したのかしていないのか定かではないが、すかさず言つた。

やはり理解していなかったのか、ミステリアは不意に疑問を呈し

た。

「そこまでしてなんで此処に来たかったの」

「それは話さなくても別に良いですよ。と言つか話すのも疲れてきましたよ」

ミスティアの言葉をはぐらかす様にその場にあぐらをかいた。

「それに、お腹も減ってきましたし」

彼は腹を摩りながら二人を見つめた。

まともな食事をしていなかった彼は良い物が食べられるのではないかと軽く期待をしたが、それは淡くも崩れ去った。

見つめられた二人は直ぐに彼から視線をそらした。

彼はその意味を直ぐに悟った。食うものなど無い、と言っ事だ。

第三話

目が覚めて、辺りの気温が体に染み、寒いな、と一人毒づいて辺りを見回した。

案の定飯が食える訳もなく、あの二人は各自自分の縄張りへと帰って言った。彼は無論帰るところなど無いため、仕方なく野宿をした。

夜の幻想郷で野宿をするなど、危険極まりないと言う事は重々承知だったが、人里が何処にあるかも分からない為、そうするしかなかった。それに死んだらそこまでだったと思えば良いだけ、と彼は考えているため、野宿に大した恐怖心は抱いていなかった。

彼は古びた鞆から少し錆付いている剃刀と鏡を取り出して自分の髭を剃り始めた。何分ずつとそつてい^{なにぶん}なかった為、伸びに伸び切っていたので邪魔で仕方が無かったのだ。

髭を剃り終わると、次に鞆から髪を切る用のはさみを取り出して、髪を切り始める。此方も髭を剃る理由と全く同じだ。

粗方終えて、顔を洗うために氷の湖の前に行ったが、人気は感じられなかった。まだ朝早いからなのか、チルノは見つからない。

そのまま湖の水で顔を洗い終え、うがいをした。

「ふう、久々にすっきりした」

湖に映る自分の姿を見据えながら一人呟いた。

ふと湖の奥を見ると、湖の終わりに紅い洋館が目に入った。

「紅魔館か……」

紅魔館。吸血鬼の姉妹が住む館。その侵入をするなど無理難題。幾ら彼が好奇心で動く人間であろうと入れる訳が無いと分かっているため、紅魔館に行く気にはならなかった。

あ、でもな。

彼は一つの案を思いついた。紅魔館の門番に人里の道を聞くという手段だ。妖怪の中でも人間に対しては好感触を持つはず、つまり人里へ行く道くらいなら教えてもらえるだろう。

そう考えている間に自然と足は紅魔館の方へと向かっていた。

紅魔館の前に着くと居ると思っていた門番が居なかった。なぜだろうか？考えても分かる訳が無いのは分かっていたため、この場で待つ事にした。中に入ろうとすれば消されるだろうし。

「ど、どいてくださいー！！！」

「え？」

急に声が聞こえたと思えば神速で隣を何かが通った。訳が分からず呆然としたが、その刹那、胸に銀のナイフが突き刺さった。

最後に映った光景は心配そうに見ている紅美鈴の顔だった。

「そして、如何してこうなったんでしょかね」

「いや、如何してもこうしないと駄目だったんだ」

目の前に急に白髪交じりの年寄りが居る。……………意味が分からないのですが。

「単純に幻想郷に行ったからぶつ殺しただけだ。大体あそこに行くのは問題ないが個人の意思で行かれては困るんだよ」

「要するに邪魔だから殺したと、てか神ですか」

「あ、うん神」

年寄りはいきついた。

「いや、別に邪魔じゃねえよ。ただ、今のままいられるのは困るからいったん死んでもらった方がいいってことだよ。それとなんか腹立ったし」

「最後意味分らないんですけど」

「気にしたら負けだ」

そんなのありか。

「つーことで、改めて生き返って貰うぞ」

そんなむちゃくちゃな。彼は心の中で呟いたが、神は聞えているにもかかわらず話を続ける。

「それで、面白い方が良いんでチート能力を着けさせてもらう」

「は、はあ!？」

思わず裏返った叫び声をあげた。神はそれを見て嫌悪感をあらわにした表情をしてため息をついた。

「とりあえず黙れ」

神は言った。

「んで、まず一つ。当然容姿を変えさせてもらっ。これは当たり前だ、既に接触している奴が居るからな。バレちゃ困る。無論自分からバラしたらもうチャンスは無いからな？」

彼は心の中で納得し、頷いた。

「二つ。見極める程度の能力をやる。無論見極めるに至ってそれについていける体もな」

「そんな事をしてどうするんですか……」

「面白いから」

神の軽い発言にただ呆れるしかなかった。

「ああ、ちなみに言うとか容姿は15歳位の容姿で不老不死だから。そこんところろしく」

「ちよつと待て」

彼は神の言葉を遮断しようとした。だが

「何も言わせないからね」

「え、ちよ」

急に地面に穴が開いた。

「おいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおい！！！！！！！！！！」

そのまま意識が途絶えた。

「ま、能力全部説明する必要なんて、無いよな」

目が覚めるとそこは全く知らない場所だった。幻想郷ならある程度知っている場所につくのだろうと思っていたが、その予想は見当違いだった。辺りは薄暗く、何処かの建物のような場所の中だろうと彼は予想した。

歩き回つてみたが、出口が見当たらない。彼が項垂れようとしたその時、後ろから足音が聞えた。振り返つてみるとそこには四季映姫・ヤマザナドゥが怪訝な顔をして立っていた。

「む……貴方は、何者ですか？いえ、そうではない。貴方は何の目的で此処に来たのですか。私に用ですか？それとも彼岸自体に用ですか？」

四季映姫は怪訝な表情を崩さないまま矢継ぎ早に彼に質問をした。

「通りで」

彼はひとりでに頷いた。

彼が頷いたのは今置かれている自分の状況がある程度把握したからであった。場所をよく知らなかったのは彼岸であった為、此処はよく情報が無いのである。それに目の前に四季映姫が居ることが何よりの証明となっていた。

あの自称神は面倒な事をしてくれましたね……。

心の中であの神に悪態をつきながら自分の体を触って今の状態を確認した。

言っていた通り15歳位の体つきになっていて、髪色が白になっている時点で容姿が変わっているのは間違いないと悟った。

自分の体を触っている彼を見た四季映姫は怪訝な表情のまま言った。

「何をしているのですか」

「自分の状態の確認ですよ」

「そうですか、それより貴方は何者ですか」

その質問に思わずとっさに頭に浮かんだ答えを彼は言った。

「神に仕えるものです。異動を命じられて此处に来ました」

ああああああ！！何言ってるんだろ……。めっちゃ恥ずかしい事言っただじゃん！どうしよ……。

思わず言っただ自分の言葉に恥じらいを感じて顔をひどく紅潮させ

た。だが、四季映姫は嘘をついていると思っていないのか彼をそのまま見つめている。

「映姫様」

空気を一変させるかのように第三者の声が辺りに響き渡る。声の方へ振り返ると小野塚小町が半分透明の人間を連れて笑顔で此方に手を振っていた。正確には此方に居る四季映姫に対して。

「こいつは誰です？」

「此方に遣された人です。なぜ来たのかは大体想像がつきますけどね」

瞬間移動してきた小町に驚く事も無く、冷静に小町に向かって毒づいた。

予想していなかった四季映姫の言葉に小町は苦笑いをしながら口を噤んだ。

「すみません」

小町は、噤んでいた口を重苦しく開けて、謝った。

「でも、連れてきましたよ」

「この一人だけですか」

「いえ、外に10人くらい」

小町の言葉を聞いた途端、映姫はこの場に居る誰もが聞こえるような大きなため息をついた。

確かにその気持ち、分からないでもない。

「それで、此处に異動してきた理由は何ですか」

「ああ、えっと——四季映姫の手伝い及び、小野塚小町の仕事率向上を目的としてこの場に来ました。主に仕事を纏める事について干渉するので、雑用等はしません」

面倒な仕事を押し付けられる前に彼は言い切った。小野塚小町の手伝いをされるとなると面倒に違い無いと彼は確信していたからだ。

第四話

こんな経験をしたのは初めてだった。

事実高校を辞めてからずっと山に籠っていたせいで書類関係の仕事などやった事が無かった。書類内容を確認してハンコを押す。この単純作業の繰り返しだが、想像以上に疲れる。主に精神的に。

書類のハンコ押しは、映姫と二人がかりで行っているが、小町が連れてくる幽霊の相手もしなければならぬ為、今までこの仕事を一人でやっていた映姫を考えると尊敬の眼差しで見ることが出来た。それと、自称神が寄越した能力のおかげで、一瞬で読み取ることができるため、自分が担当している書類にハンコを押し終えるのに時間的問題は無かった。

無論一瞬で読み取れるからと言って疲れない訳ではない。一応すべてに目を通すので疲れは普通に読んでも能力を使っても変わらないかった。

「どうぞ、お茶です」

「ありがとうございます」

映姫から受け取ったお茶を口に運ぶ。おいしい。

「思った以上に仕事が多いんですね。息抜きをしたい気持ち、分かりますよ」

「だからと言って、そうする訳にいかないのです」

書類の山を見据えながら自嘲気味に言った。

「心配してるんですか、本当に」

「ええ、本音ですよ。能力を使ってますけど、一応普通にやるより早くなるだけなので疲れは全く一緒ですし、これを疲れないと思う方がおかしいですからね」

「そうですか」

書類に目を戻し、彼に目を遣らずに単調に言った。

「あ、よく思えばまだ名前を聞いていませんでしたね」

「そうですね。一方的に映姫様の名前を呼んでいただけですしね」

確かにまだ自己紹介を誰にもしていなかった。

「彩利琴葉。これが私の名前です」

「男らしくない名前ですね」

「ええ、よく言われますよ」

今度は彼が自嘲気味に笑った。

「それより、新聞はありませんか」

「新聞……ですか？」

ふと思いついたことを映姫に投げかけた。よく思えば今日射命丸の新聞を読む予定だった事を思い出したのだ。

「ありませんよ」

「ですよー」

映姫は声のトーンを何一つ変えずに冷静に答えた。

いくら幻想郷に新聞をばら撒くとはいえ、此处は彼岸。新聞が来る訳が無かった。

「ま、彼岸にまで新聞を届けに来る妖怪なんていたら、とても普通とは思えませんか。それにしても読みたかった。どんな記事があるのか……」

「なぜそこまで読みたいのですか」

書類にハンコを押しながら横目で彼を見ながら問う。

「興味があるからですよ。人が熱心に書いた記事がどれだけ面白いのか、その生地にどれだけ熱意がこもっているのか、色々な感情が新聞から読み取れるはずですよ。それを興味の対象として見る。いたって普通だと思いますよ」

「変わってますね」

書類に目を戻して再びハンコを押す作業に集中し始める。変わっていると言われ彼は少し苦笑いをした。

「映姫様〜!」

瞬間移動で入ってきた小町が少し焦りの表情をしながら映姫を呼んだ。急に呼ばれた事が少し嫌だったのか、嫌悪な表情をして小町の方に振り向いた。

「何事ですか」

「また（・・・）、喋る霊が現れたんですよ」
「またですか」

小町の報告を聞いて映姫はため息をついた。

「喋る霊？」

「死人に口なし、基本です。なのに喋る霊がたまに居るのですよ」

映姫の言葉に納得してああ、と言漏らした。

「まあ、処理頑張ってください。私はもう疲れたのでこのままお二人の仕事を此处で見守ってますよ」

「手伝いなのは」

「手伝い、もうすでに手伝いましたよ」

彼は山のような書類の半分を差した。

「別に手伝いなのでやりきる必要はありません」

実際、でまかせだし。

「まあ、能力でアドバイスできることくらいならしますよ」

「自己中心的なんですね」

「そうですよ？」

映姫と話をしている間に小町が喋る霊を連れてきた。

少し暗い雰囲気を漂わせている。中年の男性だが何処か悲しげな感情とは別の感情を醸し出してた。

「何か未練が残ってるんですか」

「別に……」

男は答えようとせずただ俯いたままだ。

「単純にまだ死にたくなかった、らしいですよ」

「何でおれが死ななきゃならなかったんだよ！！！」

男は急に顔を上げて彼に向けて怒鳴った。

「そんな事を言うなんてまだまだですね。別に興味を持ってやったことなんですから別に死を覚悟してやるべきでしょ。そんな覚悟も無いのに興味本位で動くんなんて貴方は馬鹿、なんですか？私だったら死んでも文句なんて言いませんけどね」

「……………」

反論できなくなつたのか、男は苦虫を噛み潰したような顔をしながら黙りこんだ。

「と言うか、勝手に殺される事についてどう思いますか？明らかに酷いですよね。何にも悪い事をしていないのに。つーかなに、勝手に殺すとか自己中すぎるんだけど。マジ腹立つ死ねよくそ神」

「え、あの……」

「あ、気にしないでください」

急に口調が変わつた彼を見て周りにいた全員が啞然としていた。

「とりあえずさつさと罪の重さを調べてくださいな」

「そ、そうですね」

彼の一言で我に返つた映姫は仕事に取り掛かる。

粗方仕事を終えると、映姫は腕を上には伸ばして背伸びをした。

結構な人数の霊が来たが、一人一人映姫はしっかりと罪の重さを調べる仕事をこなした。少し私も手伝いましたが、大して手伝わなかったのであまり変わらず。

「小さいですね」

「え、如何しました？」

映姫を見て目を見開く――

「やっぱり小さい」

「もし私が考えている通りの事を言っているのであれば今すぐ殺しますよ」

「はは、御冗談を」

「と言うことは考えていたんですか」

怪訝な表情で彼を見つめる。

「いえ、別に」

映姫から目をそらした。

「小町。そろそろ仕事に戻りなさい」

「はい」

「え、このタイミングで小町さんを仕事に戻すっておかしくないですか？明らかに何か企んでいませんか？」

「いえ、別に」

先ほどの彼の返答を真似するかのように言った。

「まあ、それより一つ聞きたい事が」

「はぐらかすつもりですか、まあ構いませんが。何でしょう?」

映姫は呆れた表情をしながら吐き捨てるように言った。

「なぜそんなに小さいのですか」

「貴方が殺していい対象だったら今の発言で死んでますね」

「ええ……。興味があるからきいただけなのに……。まあ、いいや。とりあえず幻想郷に行く仕事とがありますかね」

「たまにあるかもしれませんが、今はないです。と言つか先ほどまでの話は無視ですか」

映姫の強めの発言を気にせずため息をついた。

「とりあえず」

咳払いをした。

「一発叩いてもよろしいですか」

「駄目ですね。ドーナツあげるから許して下さい」

「持っていないでしょう」

「いえ、なぜかポツケに」

そう言っただけで彼はポツケからドーナツを取り出して映姫に渡す。

「はいどうぞ」

ドーナツを映姫に渡した。

「……んむ。今度からは許しませんからね」
「分かりました。以後気をつけます」

映姫は満足げな表情をしながら持ち場に戻った。

第五話

「で、これについてどうしますかね」

彼が告げると、四季映姫は頬杖をつきながら溜め息をついた。昨日の出来事である。小町が寝てサボったせいで、霊が集まり過ぎて面倒な事になったのだ。まさか、サボって面倒な事を引き起こすとは思っていなかった為、お互いに呆れが心に出た。

「まあ、毎回の事ですから、説教を――」

「それで治らないから駄目なんですよ」

映姫の言葉をさえぎるように言った。

「説教は確かに有効かもしれませんが、でも、それで治っていない事実があるので、此処は別の案を検討するべきでは？」

「それはそうかもしれませんが、でも、そんな案があるなら等に私が実行していますよ」

映姫は彼の意見を肯定するかのように否定した。

「ですから、琴葉さんが新しい案を提案してください」

彼を見つめる目に、別の感情が入り込んでいったのが目に見えた。

「要するに面倒だからやれってことですね」

皮肉交じりの彼の言葉に映姫は顔を顰めた。

「まあ、二人で考えるのが妥当ですよ」

「そうですね。と言うことで、ドーナツをください。甘い物がある方がいいです」

「……仕方ありませんね」

彼はポケットからドーナツを取り出して映姫に差し出した。それを受け取って口に運ぶ。

「んう。それでは会議を――」

「それはできませんね」

ドーナツを食べながら言う映姫の言葉を遮った。

「なぜですか」

「口に砂糖をつけたままやる気ですか」

椅子から体を起こして、前屈みになり映姫の口元の砂糖を手で取った。

「何するんですか!」

映姫は直ぐに彼と逆の方向に向いて、冷め切った口調になる。

「急にそういうことをしないでください。と言つか触らないでください」

「取っただけなのに……」

彼は少し項垂れた。彼からは見えないが映姫の顔は少しだけ紅潮していた。

「とりあえず本題に戻しましょう」

彼は一度咳払いをして、真剣な眼差しに戻した。同時に、映姫も椅子を回転させて彼の方へと振り向いた。しかし顔を見る限り、まだ怒りに火が付いているのが目に見えた。

「ま、まずですね。私が提案する意見として一つ思いついたことを述べます。単純に誰も見ていないからサボろうとするんです。だから監視をつけてみると言うのはどうでしょうか」

映姫は顎に手をついて、考え込む。

「ちなみにその監視をするのは私でも映姫様でも無いですよ。映姫様は仕事に忙しいですし、私はそんなことしたくありませんからね」

考えている映姫になおも言った。映姫は顔を上げた。

「それは良いとして、誰が監視するのですか」

映姫は自分の中に浮かんでいた疑問符を彼に投げかけた。

確かに監視役が居れば小町もサボらなくなるだろう。だが、どうやって監視をするかが問題だった。忙しいため自分が監視に行く訳にも行かない。ならどうするのか？

考えても分からない為彼に疑問符を投げかけたのだった。

「それは、喋る霊を使えば良いんですよ」

少し上擦った彼の声が響いた。

「なるほど。それは確かに、良いかもしれませんね。ですが」

彼の言葉を否定するように言った。

「霊は喋ると言っても、小町の監視をする事が出来る有能な者はそういませんよ」

「さあ、それについては良く分かりませんが、霊の未練を利用すればそう難しくは無いと思いますよ。たとえば、霊の未練を晴らしてやる代わりに当分手伝え、とか？」

「結果的にいえば、できる（・・・）霊が来るまではこの件は放置するしかないと言うことですね」

映姫はこの提案の痛い点について、彼の目を見た。彼も痛い点をつかれた事に反抗することができずに押し黙った。

「映姫様。連れてきましたよー」

丁度良いタイミングで二人の会話を遮断するように小町の声が響いた。

小町が連れてきたのは四季映姫と同じくらいの少女だった。容姿は整っていてとても死ぬには早い年齢だ。

この霊を連れてきた後小町はすぐにこの場から出て、持ち場に戻って言った。

「名前は何？」

「小泉彩香」

彼女は少し怯えながらも単調に言いきった。彼が予想していた通りこの子も喋れる霊の様だ。

「彩香さんは、どうし——」

「そこのお姉ちゃん怖い……」

彩香はそう呟いて、彼の方へと寄り添った。

「ははっ、映姫様怖がられてますよ」

「むっ……。失敬な。そんなことは無いですよ、ね？」

「怖いもん」

彩香は断言した。何一つ虚実が混じっていない少女の言葉に映姫は一瞬悲痛の表情を見せた。

「嫌われて可愛そうな映姫様ーかわいそー」

「殺しますよ」

映姫の殺気籠った声に思わず背中に冷たいものが走った。

「そんな子供じゃないんだから、マジにならなくても……」
「なってますん！」

顔を紅潮させながら彼の言葉を真っ向から否定した。

「そんなこと言っで。顔真っ赤ですよ」

彼は頬杖をつきながら言っ。

「知りません」

「そうだ」

頬杖をやめて唐突に言った。

「この子に監視をしてもらいましょう。多分、子供が見てるとなれば、小町さんもやらざるおえないでしょうし」

「た、確かにそうですが、できるのですか」

「別に簡単に説明すれば大丈夫かと」

彼が横目に彩香を見ると、ぱかんとした表情をしていた。

「彩香さん。さっきいたお姉さんの見張りをしてもらえないかな？」

「見張りって何するの？」

やはり理解していないのか彼に問い返した。

「さっき彩香さんを此処に連れてきたよね？他の人が来たらまたあのお姉さんが連れてくるんだけど、お姉さんが無視して寝たりしてたら起こしてあげてほしいな」

「分かった！」

理解したのか定かではないが元気な返事を返した精一杯に頷いた。

「多分これで大丈夫だと思いますよ。まあ、一応心配なのでこれから彩香さんを連れて行って、やって頂けるのかこっそり見てきますね」

「それがいいですね。この子の件については後回しにするので、問題は無いと思います」

「了解です。それでは行ってきます」

彩香の手を取った。

「行こうか」

「うん！」

彼の手を強く握りしめて元気よく幼げな返事を返した。

第六話

彼の計画は思い通りに進んだ。

小野塚小町は、小泉彩香の監視が着いた事によって仕事を放り出す事が無くなった。と言うか小泉彩香がサボろうとすると注意をするため、サボることができないのだ。

仕事に追われる身になった小町は何時も会う度最初に溜め息を零す。仕事を遣るのがそこまで嫌なのか如何なのかは分からないが、溜め息には色々な意味が籠っているように感じ取れた。

寝ることができない、仕事をしなければならない、小泉彩香の遊び相手をしなければならない、と言った事を毎日やっていた。その仕事振りに四季映姫も喜んでいたが、普通に休みなく相手をしていて疲れていた。

そこで、他の閻魔から提案されたのだ。休憩を挟まないか、と。

本人は別に休暇などいらないと言ったが、他が聞く耳を持たない為、仕方なく、休憩を挟むことを承諾した。

他の閻魔から提案された休憩とは、午前中の間四季映姫が霊の罪状を把握し、裁く作業を行う。そして午後は他の閻魔がその作業を担当して午後の間は毎日休暇、と言うことになった。四季映姫の作業量は既にほかの閻魔と比べ物にならないほどらしいので、午後も毎日休暇でも問題が無いらしい。

「はあ……………、仕事好きにもほどがありますよ」

思わず映姫の前で大きくため息をついてしまった。

折角毎日午後の休暇をもらったと言うのに、毎日休憩の時間は幻想郷を訪れて誰かを説教しに行く、と言ったのだ。説教するのは良いが、そこまでする必要あるのだろうか。毎日映姫が説教をしているところを想像すると、説教されている側が可哀そうに思える。と言うか可哀そう。

別に映姫自身が言った事であるため、否定することはできないが、ちよつと……、仕事熱心すぎである。

「ついて来なければ良いじゃないですか」

そういう問題じゃないのである。

「いや別に……。幻想郷に行きたいからついて行きますよ」

「来るんですか……」

「その露骨な嫌がり方やめていただけませんか」

溜め息をついて映姫は肩を落とした。わざと声のトーンをとって言うとか酷い。と言うかそこまで嫌がらなくても。

「それより」

考えていることを一掃して咳払いを一つした。

「幻想郷の何処に行くんですか」

「白玉楼ですよ」

「なぜ白玉楼に？」

「西行寺幽々子の幽霊の管理が最近、厳かになっているのです。ですから——」

「説教してまじめにさせよう」と

「そういうことです」

彼の一言に納得して映姫は少し笑みを見せる。そして、そのまま彼の手を掴んだ。何をするのかと思うと、繋いでいない方の手を目の前に翳した。

「何をする気で」

「何って、白玉楼に行くのですよ」

映姫が言ったその刹那、目の前が真っ暗になった。

暫くして視界が晴れると、永遠に続きそうな位長い階段の前に立っていた。一段一段傷一つない階段は、何故か一段と不気味に感じた。

階段を久々に見ると、新鮮に感じる。思えば十年近く階段、もとい人間が作ったものを目にしていなかった為、どうにも違和感が体から離れない。決して利用していた時の記憶が無い訳ではないのだが。

映姫はぼーっとしている彼を差し置いて一段一段階段を上り始めた。まさか一段一段上るのであるうか、と尋ねようとした所で映姫が此方を手招きをした。

「早く来てください。置いていきますよ」

「あの、一つ言いたいことが」

「何でしょう?」

映姫は彼の言葉に疑問を持ったのか彼を見据えながら問う。

「一段一段上るのよりも、さっさと白玉楼に行けばよかったんじゃないですかね」

「そんなことをして何になるんですか」

「いえ、それ以前に階段を上って何になるんですか」

「心が落ち着きますよ」

「……。もう何でもありません」

映姫に反抗するのを諦めて、仕方なくトボトボ階段を上り始めた。まあ、これ以上反抗した所で冷静な答えを返されて何も言えなくなる落ちが目に見えている。何せ相手は四季映姫様ですからね。

「それにしても、霊がつようよしてますね」

辺りを見渡す限り霊霊霊。目を閉じない限り、視界の何処かに必ず霊が映る。

冥界で霊が沢山居るのは分かるが、此処まで居るとなると、少々気が参ってくる。かと言って此処で止まったら怒られるだろうか。多少の苦は受け入れるしかない。

「何だか気持ち悪くないですかね」

「貴方よりは気持ち悪くないですよ」

「ははっ、御冗談が上手ですね」

「冗談ではありませんから」
「……」

思わず肩を落とした。

暫く階段を上っていくと、少し先の場所に大きな和風の屋敷が見えた。辺りの幽霊は先ほど階段の入口に居た時よりも遥かに数が多くなっている。

館の前に着くと、案の定門番が怪訝な表情で此方を見つめる。

「何の用ですか」

「西行寺幽々子に用があつて来たのです。通していただけますね」
「少しお待ちください」

魂魄妖夢は、此方に立ち止まるように指示をして館の中へと入って行った。

「堅苦しいなあ……」

「そうですか？私は別にそうは思いませんよ」

「映姫様がにゃん」とか言ったら和むんですけどね」

「自分が女装して言ったらどうですか」

「そんな返しが来るとは思わなかった……」

「それ以前に、女装したら男の面影無くなると思うので問題ないですよ」

「えっ」

映姫の言った言葉に思わずあっけらかんな表情をした。

「それって――」

「お待たせしました」

彼の言葉をさえぎるようにタイミング良く魂魄妖夢が戻ってきた。しかし、その目は客人を招き入れる様な目ではなく、どちらかと言うと、敵を見る様な目で此方を見ていた。

「入れるな、と言うことだそうです」

「そりゃ、映姫様の説教なんて受けたくありませんからねー」

「今何と？」

「いやだから、説教なんて受けたくない」と

「説教はまず貴方からやりたい所ですが、先ずは此处を通していただけませんか」

映姫の殺気籠った声に妖夢は少し怯んだが、その場から此方を見据えたまま動こうとしない。

「威勢がいいのは良いけど、面倒事に巻き込まれたくないなー私はそれに、幼女が刀を抜こうとするな、やめなさい。お父さんが泣きますよ」

「幼女じゃありません!」

顔を真っ赤にして妖夢は激しく否定する。

「と言うか、幼女同士が争うな。可愛いが争うものじゃない」

「「幼女同士?」」

妖夢と映姫の殺気染みた声が何一つ交じりが無く重なった。

「ん、如何しましたか」

「妖夢さんでしたっけ？此処は一時休戦としましょう」

「そうですね。それが一番良いでしょう」

「え、あの、何を急に――」

私が言いきる前に二つの拳が左右の頬に減り込んだ。

なぜ拳……。

私が目を覚ますと、六畳程の和室で、座布団を枕に横になって寝ていた。隣には何故かぐったりとしている西行寺幽々子が居た。恐らく説教を受けた後だろう。

体を起こすと、予想通り顔が痛い。正確には頬。酷く力が籠った拳を受けた痛みは伊達なものではなかった様だ。不老不死だと言うのにまだ少し痛む。

起き上がった彼に気付いた幽々子は彼の顔を覗き込むように目を合わせた。

「面白い人間ね。閻魔と家の庭師に喧嘩を売るなんて」

「喧嘩を売ったつもりは、無いんですけどね……」

ため息交じりに言葉を吐き捨てた。

「貴方は何者なのかしら」

「映姫様の手伝いをする者です。そんなことより……、新聞はあり

「ませんか？」

「新聞？」

彼の言っている意味が分からないのか、幽々子は疑問を顔に浮かべた。

「ほらあれですよ、なんでしたっけ。射命丸文の――」

「ああ、文文。新聞ね」

「そう、そうです」

「それがどうかしたのかしら？」

「もしあるのであれば、見せていただけないでしょうか」

「構わないけど」

幽々子は棚から一つの新聞を取り出し、彼に手渡した。

第七話

新聞には、彼がこの姿になる前に事が記されていた。

この新聞が何時発行されたものなのかは定かでは無いが、紅魔館の前で血まみれの状態で倒れている彼が写っていた。やはりあの時私は死んだのか。

新聞の一面はこの記事で埋まっていて、他は大して気になるような事は書いていなかった。

「面白いわよね。その人間の死体が次の日には消えていたそうよ」
「えっ」

思わず幽々子の言葉に疑問を浮かべ、顔を見た。

「何だか知らないけど、世の中不思議な事あるのねー」
「確かにそうですね、でもまあ、幻想郷自体不思議ですけどね」
「ふふっ、否定しないわ」

幽々子は軽く笑って、笑みを見せた。

死体が消えた事については大体想像がついていた。自分が今新しい体で生きているのだから、前の体が消えるのは必然なのだろう。と、彼は思った。

「そう言えば、お二人は何をしているんですかね」
「妖夢は庭掃除で、閻魔は帰ったわよ」
「え、ちょ……私は放置ですか」

思わず置いて行った時の映姫の顔を想像した。多分笑ってるな。

「日付が変わる頃に迎えに来るそうよ。何で私が伝言しなきゃいけないのかしら」

「すみませんね」

彼は苦笑いをしながら幽々子に軽く頭を下げた。

「だとしたら、やる事が無くなりました」

「それなら、お茶なんてどうかしら」

幽々子は暇なのか彼を期待の眼差しで見つめながら単調に言った。彼もやる事が特に無いため、否定する必要は無いと判断して、幽々子の提案を承諾した。

「妖夢ー！お茶とお茶菓子持ってきてくれるかしらー」

「分かりましたー！」

庭の方から元気良い返事が返ってきた。

「いやー、元気のいい子ですねー」

「あれでも五十年近く生きてるわよ？」

「見れば大体分かります。でも、その割に胸が小さいのが少し……」

「……貴方スケベね」

幽々子はきつぱりと言った。

「ゆうこさんは大きくて良いですけどね」

「褒めてくれてるのか分からないけど、まず言いたい事があるわ」

「何でしょう?」

「ゆうこじゃなくて、ゆ・ゆ・こ・よ!」

名前の部分を大きな声で強調するように言った。名前を間違えられたのがあまり心地よくは無かったのだろう。

「ははっ、失礼。つい美しい容姿に惑わされて名前を間違えてしまいましたよ」

「お世辞も良いとこね」

「お持ちしました」

会話の方向性があやふやになった所で、丁度良く妖夢がお茶とお茶菓子を二つ運んできた。

「では」

妖夢は一言言っただけでその場を後にした。

「何をしているのかしら」

急に声が聞こえたかと思えば、目の前にスキマ(・・・)ができて、そこから八雲紫がスルッと出てきた。

思わずスキマの中を見て彼は気持ちが悪くなったが、顔には出さなかった。

「紫如何したの急に」

「暇だったのよ、ひーまーなーのー」

紫はうんざりした表情をしながら、溜め息をついて言った。

「とてもお疲れのように見えますが？」

「それは、まあ……、色々あったのよ」

「まさか紫も、閻魔に？」

「幽々子もなの……」

お互い目に少量の涙を浮かべながら抱擁しあった。

「ははは……、映姫様すぐに帰った訳じゃないんですね」

「映姫様って……、それ以前に私の名前を知ってるって、貴方何者なの」

紫は薄く警戒心をあらわにしながら、彼に問うた。

「いやぁ……今は、一応映姫様のお手伝いをやってますね」
「そう」

紫は興味無さげな表情をして、小さく言った。

「お二人の事、私はよく知っていますよ」

彼は二人の心を揺さぶる一言を言った。案の定この言葉を聞いた二人は彼の顔を怪訝な表情で見つめ始めた。

「何を知っているって言うの」

「それは、お二人の中がとてもいいと言うことです」

「はぁ？」

彼の思いもよらない一言に、目から念が霧散した。

「何なのよ……」

「何なの、強いて言うなら、私には彩利琴葉、という名前があります」

「琴葉って言うのね」

名前を聞くと、幽々子は満足げに表情を変えた。

「おかしいですか？」

「一方的に名前を呼ばれて、名前を聞こうと思ったのだけれど、上手く聞き出せる時が来なくて聞けなかったのよ」

「それはそれは、失礼しました」

軽い口調で彼は頭を下げた。

「それにしても、暇ですね。お茶とお菓子は美味しいですが」

そう言ってお茶菓子を丸々一つ口に頬張る。

「まあ、お二人の水着姿でも見れば、良いんですけどね」

「しないわよ……!」

彼の言葉に一足先に反応したのは紫だった。その瞳には炎を燃やしていた。そこまで起こる必要はあるのだろうか。

「紫の水着姿……、面白そうね」

「ゆ、幽々子も何言ってるのよ」

思いもよらない一言に紫に動揺が走る。

「冗談よ冗談。私だって水着は嫌よ」

「ええ……」

「そこでガツカリしないでくれなにかしら」

「良いじゃないですか……」

「嫌よ」

二人の重なった声に思わず彼は酷く頂垂れる……………フリをした。

だが、二人は気に留めることも無く、新たに妖夢が用意したお茶を紫は啜って、ふう、と一つため息をついた。

「ため息ばかりついていると、年を取りますよ」

「失礼ね」

紫はキツと彼を睨みつけた。

「睨まないでくださいよ。そんな顔をしていると年を取りますよ」

「貴方は私に殺されたいのかしら」

「いいえ、そんな訳無いじゃないですか」

彼は苦笑いをしながら身振り手振りを加えて否定した。

皆私を殺したいのでしょうか？

「うあー。やることない」

その場にゴロゴロする。

「会ったばかりの人の家でよくそこまで寛げるわね」

「自分の家だと思えば良いだけですから」

幽々子は頼杖をつきながら寝っ転がっている彼に対して当たり前の発言を投げかける。だが彼は、その普通の発言にいたって普通ではない答えを返す。

その様子に幽々子と紫はただ呆れるしかなかった。追い出すわけにもいかない為だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3245y/>

東方好奇人

2011年11月18日06時49分発行